

金子文子の形象化をめぐる

—瀬戸内晴美『余白の春』論—

安 元 隆 子^{*1}

Review of giving the form of kaneko Fumiko
— A study on Setouchi Harumi 's "Yohaku no haru"—

Takako YASUMOTO^{*1}

This essay explained about "Yohaku no haru" written by Setouchi Harumi. Setouchi wrote Kaneko Fumiko's biography based on Kaneko Fumiko's autobiographical novel "Nani ga watashi wo kousasetaka". The features of Setouchi's novel are next.

1. She wrote this biography based on the research done in these days. 2. She wrote this in field surveys. 3. She expressed her friendship towards Korean people just same as Kaneko Fumiko. 4. A weak point of this novel is that nothing is mentioned about her being raped by unknown assailant. This is a very important matter, but Setouchi didn't write this in the biography. 5. She was interested in the reason for Kaneko's suicide. She thought the Kaneko's love for her partner Paku couldn't last and Kaneko's nihilism killed her. But the study of Kaneko's nihilism didn't contain much detail. I will return to this subject again.

【はじめに】

1923年の9月1日に起きた関東大震災を契機に朝鮮人暴動の流言が広がり、在日朝鮮人が虐殺される中、金子文子は朴烈と共に保護拘束され、拘留された。そして、1925年7月には皇太子暗殺の意図があったとして、刑法第73条（大逆罪）及び爆発物取締規則違反容疑で起訴され、翌1926年3月25日に死刑宣告を受ける。この後、無期懲役に減刑されるも、7月23日に栃木女囚房内で縊死を遂げた。

金子文子が「無籍者」ゆえに教育の機会を奪われ、親の愛に恵まれない幼少時代を送ったことや、続く朝鮮時代の悲惨な生活の様子、帰国後、精神の自立を求めての上京生活は、金子自らが執筆した自伝『何が私をかうさせたか』¹に綴られている。

る。しかし、この自伝に書かれているのは主に朴烈と出会った頃までであり、この後、いわゆる「大逆事件」に至る経緯、そして、拘束後に自ら命を絶つまでの彼女の精神の軌跡は残された尋問調書、公判記録、僅かな短歌や書簡等から辿るしかない。金子文子は何故自ら死を選んだのか。その末期の思想について探求しているのが瀬戸内晴美の『余白の春』²である。瀬戸内は次のように書いている。

文子が筆を擱いた朴烈との出会い以後をさぐり、文子を書いた半生の更に深部に光をあててみるに足る魅力を、充分に持っている女性であった。³

本論では、この瀬戸内の『余白の春』に描かれた、瀬戸内の紡いだ金子文子像、特に彼女の末期の思想について検討する。管見では、本論で触れ

*1 日本大学国際関係学部国際教養学科 教授 Professor, Department of Liberal Arts, College of International Relations, Nihon University

る李順愛氏の「日本人女性と天皇制」⁴の他は、この著書について本格的に論じたものは見当たらない。この著書を論じることは、金子文子の死後、彼女が後世の人々にどのように語られ、享受されてきたのか、金子文子受容の一端を明らかにすると共に、金子の至りついた思想解明のための一助となることだろう。

【1】菅野須賀子、伊藤野枝そして金子文子

瀬戸内晴美は『余白の春』以前に、明治の大逆事件の唯一の女性被告・菅野須賀子の伝記『遠い声』⁵を執筆している。これは菅野須賀子が遺した「死出の道艸」⁶を基に、絞首台の露と消えるまでの菅野須賀子を追ったものであり、幸徳秋水や荒畑寒村との交情、そして、社会変革への意志と直接行動主義をとるに至った菅野須賀子の跡を辿っている。全文は「私」が語っており、菅野須賀子の独白の形をとっている。

これに対し、金子文子を描いた伝記文学『余白の春』は、語り手「私」がいて、その語り手「私」が金子の生きた跡を辿る。それはまず金子の残した自伝『何が私をかうさせたか』を検証する旅である。金子の実家のある山梨、朝鮮の英江、金子が埋葬された栃木の刑務所の無縁墓地や聞慶の山中の墓を訪ねている。

瀬戸内は、

私の過去の生活が総ての権力を否認し叛逆して、自分はもとより人類の絶滅を期してその運を計っていたのであります。それゆえ私はいずれは爆弾を投じて自己の最後を遂げる意思でありましたけれども、その結果日本に革命が起きようと起きまいと、毫も私の知ったところではない。私はただ自分の気持をさえ満たすればそれで満足している⁷

という金子の心の闇に惹かれ、「私は文子の生い立ちをたどる以前に、文子の死様や、死の周辺のことを気がかりになるのである。」⁸と書き、特に文子の最期に関心を示している。

しかし、その死を描いた『余白の春』は金子文子自身の死の描写から始まってはいない。大杉栄と共に憲兵大尉・甘粕正彦に殺された伊藤野枝の

手紙の一節から始まっている。平穏無事な家庭の幸福がいつ奪い去られるのか分からず、尋常ではない死の別離が到来する覚悟を述べる内容である。この覚悟が現実となり、関東大震災を機に朝鮮人暴動の流言飛語が飛び交い、朝鮮人狩りがエスカレートしていく。この朝鮮人虐殺の様子を確かめべく瀬戸内は生き証人を尋ねて大和郡山市を訪ねた様子を記す。『東京震災録』⁹や『昭和時代』¹⁰『横浜市震災誌』¹¹といった書物からの引用だけでなく、こうした自ら取材した証言を挿入することにより、瀬戸内は当時の状況に鮮明な色付けをすることに成功している。このように文献から得た情報を自らの手による取材によって検証していく方法はこの『余白の春』に徹底している。それは瀬戸内の真実を確かめたいという探究心の表れであり、また、読者に事実の確かな重みを印象付ける。

続いて瀬戸内は関東大震災の騒乱の中での大杉栄と伊藤野枝、甥の宗一の検束、そして3人が殺害される場面を描写する。背後からいきなり甘粕大尉に首を締めあげられ殺された大杉に対し、伊藤の場合は甘粕との会話を描写し、その異常な殺害を際立たせている。突発的な天災としての被害だけでなく、人間の奥底にはびこる悪を露見させ、恐怖に満ちた残酷な地獄を現出させた関東大震災について、瀬戸内は次のように書いている。

しかもそれらはことごとく、政府と軍部の陰謀、警察力を動員してつくられ、招きよせられたこの世の地獄であったのだ。¹²

この言葉こそが金子文子と朴烈を大逆罪に導いたものが何であったかを示唆している。大杉栄と伊藤野枝は金子文子と朴烈の死の先達であることを読者に知らせる意図があったゆえ、瀬戸内は冒頭に彼らの死に様を描いたのであろう。

ただ、大杉・伊藤と金子・朴の死に様は大きな隔たりを示している。周知のように、1919年3月1日に朝鮮の独立運動（3.1運動）が起こる。3.1運動に端を発する在日朝鮮人の革命分子と社会主義者の連携を絶つために日本政府が利用したのが、関東大震災だった。大杉と伊藤の告別式は死後3ヵ月経って行われ、大杉の遺骨の持ち去り事件が起きる中、労働運動社、無政府主義団体、

自由連合派諸労働組合の合同主催で700名の人々が参集した。参会者は「無政府主義万歳」と口々に叫び、斎場を取り巻いた警察官は「中止！解散！」と叫び、それはまるで演説会場のようであったと瀬戸内は書いている¹³。そして、同日、難波大輔が、朝鮮人虐殺の責任を天皇に問うとして、虎の門で天皇を待ち受け、ステッキ銃で狙撃して逮捕されるという事件も起きる。幸徳秋水、菅野須賀子らの大逆事件から十余年、難波大助の大逆事件が起こり、政府は威信を賭けてこうした不祥事の再発を防ぐ必要があったのだ。当時の官憲側の意図を瀬戸内は次のような言葉で表現している。

火のないところにも煙をたてて、反逆の芽を摘み取るにこしたことはない。¹⁴

このように、大杉と伊藤の死を冒頭に置くことによって、これから展開する朴烈と金子文子の死がフレームアップされた大逆事件であることを読者に告発していると言えるだろう。

そして、大逆事件を計画し、事前に発覚して捉えられ我が国初の女性大逆罪受刑者として絞首台に消えた菅野須賀子が遺した日記「死出の道艸」と金子文子の残した『何が私をかうさせたか』を比較している。前者は原稿用紙に換算すれば50枚に満たない文章であり、後者は700枚に近い文章である。家庭的に不幸な生い立ちは二人に共通しているが、金子の方がより悲惨だという印象は否めない。しかし、30歳と23歳で夭折した二人の罪名は、共に刑法第73条の大逆罪である。また、幸徳秋水、大杉栄、共に時代が生んだ風雲児であり、卓越した男たちであったが、金子と共に歩んだ朴烈は強い意志と知力を兼ね備えた青年ではあったものの、名もなく貧しい、当時はことごとく差別を受けていた朝鮮人であった。金子はその朴烈を愛し、自らの思想を深めていった。そして、金子は殺害されたのでも刑死したのでもなく、獄中で自ら命を絶っている。こうした金子文子の死は同時代に生きた伊藤野枝とも、また、「大逆事件」の先達ともいべき菅野須賀子とも一線を画している。瀬戸内の金子文子の死への関心の理由はここにある。

【2】瀬戸内晴美の朝鮮の描き方

『余白の春』では、『何が私をかうさせたか』と尋問調書、そして、瀬戸内晴美自身が行った取材を併せて金子の生涯が描かれる。それはほとんど時系列に沿っているのであるが、『余白の春』は金子文子の朝鮮時代の描写を簡略化している。朝鮮では、父方の祖母の家の「岩下」の子になったはずが、いつのまにか「金子」姓に戻されてしまったこと、そこで女中同然の扱いを受けたこと、祖母の吝嗇と虐待に耐えかねて、自殺まで考えた地獄のような生活を送ったことについて触れているが、その詳細はほとんど語られていない。瀬戸内自身も書いているように、自伝の中で文子が朝鮮の悲惨な思い出に費やしているページは全体の4分の1という大きな比重を占めているが、『余白の春』では本文311ページ中、併せてわずか10ページほどである。これは何故なのであろうか。

金子文子の朝鮮時代は、朝鮮という外地の日本人社会と日本人家庭に所属しながらも、実質は日本人より蔑視され虐げられた朝鮮人と同等の立場に置かれたことで、外地の中での日本人社会と現地の人々との差別的構造を実感として知ったのである。この体験なくしては、帰国後の朝鮮人との連帯はなかったであろう。また、『何が私をかうさせたか』の朝鮮時代の記述にある朝鮮人の具体的描写としては、憲兵に鞭うたれて聞こえて来る朝鮮人の悲鳴、祖母に家を追い出された文子に優しく声をかけ、食べ物を与えてくれた近くの朝鮮人のおかみさん、そして、祖母の岩下家に仕える下人・高の姿がある。高は洗い替えのための着物がなく、洗濯のために休みを取らねばならないほどの貧しさであるが、岩下家で愚直なまでに勤勉に働く男である。こうした朝鮮人との出会いが後の朴烈をはじめとする朝鮮人との連帯に結びついたことは言うまでもない。当時の多くの日本人が蔑視した朝鮮人に対する金子の真摯なまなざしは、この朝鮮生活なくしてはありえない。瀬戸内は『余白の春』の本文中に栗原一男の次のような述懐を引いている。

感情家で、純真で、お人好しなんだ。朝鮮での悲惨な思い出話や、朝鮮人がどんなに虐待

されていたかなどという話になると、もう自分のことばに酔ったように激昂してしまって、涙を流しながら、とどまるところを知らない早口でとめどもなくまくしたてるんだな。朴烈がこまって、もういいかげんにしろなんていっても聞かない。どこまでも喋りまくる。そういうところがあった。¹⁵

ここからも朝鮮に対する金子の思い入れは相当深いものであることがわかる。にも関わらず、その朝鮮での生活を述べた部分について、瀬戸内は詳しく触れなかった。

しかし、注目すべきは金子が朝鮮時代に出会った人々や出来事の代わりに、瀬戸内は朝鮮の「運命」を日朝修好条規（1876年）のころから歴史的に客観的に振り返って記載しているということだ。朝鮮が日本によって侵略されていく過程を日清戦争、日露戦争、そして日韓併合後の日本の苛酷な統治について詳しく述べている。東洋拓殖株式会社という農業の国策会社の創建によって、朝鮮の土地や家は次々と日本人の手に渡り、なすすべもなく奪われてしまう。結果、人々は日本人の小作人になるか、日本に朝鮮人労働者として渡ったのだった。1916年には東洋拓殖株式会社の所有土地は10万4280丁歩におよび、農耕地を奪われ、日本人の小作人に転落した農民は33万1748名に及んだという。そして、金子の手記には書かれていない3.1運動¹⁶について詳細に述べていることである。この独立運動を弾圧する日本兵らの暴虐ぶりを刻んだ塀の壁があるパゴダ公園を訪問した際には、今なお消えない朝鮮人の日本帝国主義への憎悪の念を表出している。瀬戸内は、日本と韓国との間の不幸な歴史を個人のレベルではなく、国家のレベルとして捉え、その不幸な関係は今もなお両国に影を落としていることを伝えているのだ。一方で、金子の滞在した英江を訪ね、朴烈の実家や金子の墓を訪ねた際の、金子の元同志たちが今も彼女を想い慟哭したことを書き留めている。この慟哭の声を『余白の春』の末尾にも再度登場させ、日本の土になることを拒み、朝鮮に文字通り骨を埋めることを選んだ金子と朝鮮人との今なお色濃く続く結びつきを示している。

このような叙述方法からは金子の体験を時代の

中に還元し、個人としての体験から当時の日朝関係に普遍化する意図が読み取れるといえるだろう。その中で、支配・被支配に基づく日朝両国関係を覆そうとする、国を超えた強い連帯があったことをこの慟哭の声は体现している。

【3】描かれなかった男

このように、金子自身が書いた自伝とは書き方や比重を変えながらも、自伝『何が私をかうさせたか』の構成要素の多くは『余白の春』の中に取り込まれている。だが、瀬戸内が触れなかったことがある。それは金子の初めての性体験についてである。

瀬戸内は、朝鮮から帰国後の金子と叔父の元栄との親交、瀬川という不良との交際や朝鮮人留学生との肉体関係、そして、クリスチャン斎藤との交際など、男女関係については、自伝や尋問調書を基にほぼ正確に記している。だが、その瀬戸内が触れていないのが、文子の初めての性体験についてではないか。

金子は浜松の実科女学校の裁縫専科で学んでいた頃、夏休みに入り、叔父の元栄に会いたくなって山梨に戻り塩山駅の近くの母の嫁ぎ先に立ち寄った際、駅で気分が悪くなって臥せっていた金子に声をかけてきた男を親類の男と勘違いし¹⁷、一緒に小料理屋に上がった彼女は男に襲われてしまう。その時の様子を自伝では次のように書いている。

あゝ何と云ふ悪魔で彼はあつたらう。振り拂ひ、振り拂ひ、矢を負つた獣物のやうに、私は夢中になつて狭い急な梯子段を駆けおりた。（中略）

この事を私は、今までついぞ一度も口外した事はなかつた。けれど、私の存在がもう何時この世から消え去るかも知れない今となつては、隠して置く必要もない。私の生活や思想や性格の上に大きな影響を及ぼしたであらうと思はれる何ものをも私は今、白日のうちにさらけ出して置かねばならぬ。それは皆に法官が私を見る一つの材料として必要であるより、もつと大きな真理の闡明のために絶対に必要なことだと思ふからである。¹⁸

この自伝執筆に於いて初めて告白され、金子の人間性に大きな影響を与えたというこの事実は、朝鮮から戻ってそう遠くはない時期に起きており、金子にとって初めての性体験であったと考えられる。しかし、それは金子の＜人違い＞により、男に力づくで凌辱されるという痛ましい事実でもあった。だから、金子は獄中に置かれたこの時まで秘し続けてきたのであろう。とすれば、それは彼女にとって大きな意味を持つ出来事であったに相違ない。しかし、瀬戸内は全く触れていない。

金子文子が関係を持った男たちは多かれ少なかれ、金子が納得して関係を持った男たちである。そこには性に対する憧れや本能的な性欲が存在しているにしても、また、男の性欲の対象として彼らが金子を求めただけの場合にしても、金子自身が自らの意思なくして蹂躪されたということとはなかった。しかし、この場合だけは異なっている。金子の＜人違い＞から不意に男の性暴力の餌食となるのである。男に捨てられたり、貧苦にあえぎながらも金子は自分の意思で人生を選択してきた。しかし、それが叶わなかった瞬間、それがこの時だったともいえる。ここには、性における力による支配・被支配の構図が成立する。この体験が根底にあったからこそ、異性との対等なパートナー関係構築を求めたともいえるのではないか。それは勿論、朴烈と出会うまでは叶わないものであった。朴烈との関係について金子は、後の被告人尋問調書の中で次のように語っていた。

私は朴に対し同志として同棲する事、運動の方面に於ては私が女性であると云ふ観念を除去すべき事、一方が思想的に墮落して権力者と握手する事が出来た場合には直ちに共同生活を解く事を宣言し相互は主義の爲めにする運動に協力する事を約して私等は同棲する事に決意したのであります¹⁹

このような性を超越した関係を目指すことになる原点には、この駅で出会った男との体験があったはずである。ゆえに、瀬戸内がこの点について触れていないことは不思議であり、また、残念でもある。

また、訊問調書には、

元栄は真実、私と結婚する意思を持っていま

せぬでした。

処女性を弄ぶ事を考えて居た外何物も無かったのであります。（中略）其の年の秋、退校して郷里に帰りますと、当時、元栄には別に愛人がありながら同人は私の処女性を破った上、私の父に対し私がお転婆であるが為寺に向かない事、他の男から私に宛てゝ手紙が来た等の事を口実に、破談を申し込んで来ました。（中略）叔父元栄は私の上に先づ権利だけを行使して、自らその義務を履行しない責任を私に負担させたのであります。²⁰

とある。また、自伝にも元栄の次のような言葉を書き留めている。

「いやなことさ。いくら美人でもありやもう処女ぢやないよ……」

さうだ、その頃、叔父の求めたものはたゞ処女だったのだ。そして私も亦、処女だったのだ、たゞそれだけの理由で私を彼の妻にすると云つたやうな馬鹿気たお伽噺を、馬鹿な私の父に約束したのだつた。²¹

元栄が「処女」のみを求めていたとすれば、金子との縁談を破棄した理由も納得がいく。金子が自分の勘違いが原因で襲われた男により処女ではなくなっていたとすれば、元栄が金子との関係を結ぶ中で、処女でなかった文子に幻滅し、縁談を断つたと考えるのが自然であろう。そして、金子自身の「処女」と「処女性」の微妙なことばの使い分けにも留意すべきである。元栄との性体験は金子にとっては好意を持っている相手に抱かれるという初めての性体験に等しいものであったが、元栄は即物的に金子との性体験を捉え、金子に処女としての価値を認めなかったのであろう。瀬戸内は、金子の元栄への心の傾斜は、「思春期の恋を恋する漠然とした本能の情緒」²²と見抜いている。と同時に、金子が元栄との情事の具体的な描写には一切ふれていないことに注目していて、「文子がいかにそれについて語るのを屈辱と思うほど、元栄には気を惹かれていたのではなかっただろうか。」²³と書いている。しかし、そうではないのではない。これまで追ってきたように、処女性を保っている、処女ではなくなっていた金子に対する幻滅や興味の減退をあからさまに示した元栄との屈

辱的な一夜だったのであり、金子は意識に上らせたくなかったと考えられる。しかし、この自伝はすべてをさらけ出すことを意図している。それによって、今まで隠していた男に蹂躪された過去を思わぬ形で金子はさらけ出した。このことにより、元栄との一夜の詳細には触れなくとも、前後の顛末からその実態が読者に想像される仕掛けを作っている。ただ、瀬戸内はそれに気づかなかった、または気付いてはいたが書かなかったのである。

【4】金子文子の末期の思想

瀬戸内は爆弾の入手と投擲をめぐる新山初代、金重漢、朴烈とのやり取りを裁判記録から再現している。²⁴ 注目すべきは証言のために呼び出された李小紅²⁵についての記述である。この李小紅に瀬戸内が注目し、ページを割いているのは興味深い。小紅はまだ二十歳そらの若さでありながら、尋問に動ぜず、検察官に対峙して一步も譲らない。瀬戸内は彼女の肝の坐った態度を高く評価している。金翰²⁶に対しても同様である。金翰はただ爆弾の取次ぎをしただけであり、使用目的は感知していないと嫌疑を一蹴した。これに対する検事の日本の政府に対して徹底的に反対するとは非常手段を執るより外には途が無い云々と云へる朴烈の言は、一般的に抽象的に朝鮮青年として常に云ふ処であると申し出たが、朝鮮青年は果して、其様な考えを持っているのか²⁷という質問への、金翰の答えは以下のものであった。

忌憚なく云へば苟くも朝鮮人と称せらるゝ者は死を以て日本人の前に立つてありませう。此朝鮮人の反抗的心理は、各自の性格と生活境地の社会的関係よりして、或は虚無主義、無政府主義、共産主義、或は民権主義としての形式に於て現はるゝでありませう。私は朝鮮人が日本国民に反抗することを以て永劫的の運命と確信して居る²⁸

このような日本の法廷における朴と金子以外の朝鮮人の発言を取り上げ構成している点は『余白の春』の特色と言えるだろう。ここには瀬戸内自身の「朝鮮」への親和的なまなざしが投影されてい

ると考えられる。²⁹ そして、その背景には徹底した尋問調書や公判準備調書の読み込みがあることは言うまでもない。圧巻なのは、これらの作業を通して、金子の最期に迫っていることだ。瀬戸内の解釈は次のようなものであった。

金子の小さな体には生まれながらにして恵まれた強肩な忍耐と、天賦の才能、同時にただ事ではない強烈な生命力が与えられていた。そして、「文子にとって生きるとは、学ぶことと闘うこと」³⁰であった。男たちを次々と捨てていき、傷痕を残さないのは彼らが金子よりはるかに生命力のボルテージが低く、官能の満足くらいしか与えることができなかったからではないか、というのである。瀬戸内は金子が求めたのは

自分の根底から自分を揺さぶり掴みとってくれる男の強烈な生命力、自分のおびただしい生命力に対等に太刀打ち出来るボルテージの高い生命力そのものではなかっただろうか。³¹

とする。一見やせ細った貧相な朴烈に金子が惹きつけられたのは、朴烈がこのような生命力を内包していると感じ取ったからに他ならない、というのだ。「生命力」の語を以て朴と金子を理解しようというのは瀬戸内らしい。

そして、瀬戸内は、金子が事件に朴烈と同質の重さで関係しようとしたという。朴烈より先に金子が爆弾使用の計画を自供し、続いて皇太子をねらったことや金翰や金重漢との関係についても、朴烈が金子にそれらすべてを相談して共謀した、と供述している点に着目しているのである。これは金子が取り調べに耐えられず自供したのではなく、金子の朴に対する想いがそうさせたのだと瀬戸内は見ている。そして、尋問を担当した立松判事が、金子の供述を朴烈に問いただし確認するという順序を取ったことも指摘し、問われた朴は金子のことを考え、慎重に答えていると見ている。例えば、朴は立松検事より、金子は最初から朴と相談して爆弾投擲の計画を立てたと述べ、金翰は朴に依頼され上海へ爆弾を取りに行くことを承諾したと陳述していることを聞く。すると、朴は、逆に爆弾投擲の目的と対象について二人がどのように述べているのかを問い、金子が皇太子殿下を

対象としたと答えていることを知り、そして、「文子が朴烈と共に死ぬことを最大の望みとしている心情」³²を察して次の言葉を語ったのだとする。

金子がそのように言っているとすれば、俺もその対象について決定的にいうことが出来る。

実は俺は日本の皇帝皇太子も爆弾投擲の最も重要な対象物としていたのだ³³

瀬戸内はこのように尋問調書を丁寧に読み比べ、そこから朴烈と同等に思考し行動したいという金子の願いを読み取っている。そして、一方の朴烈は、金子のことを想い、同等の罪が着せられてしまうことを避けようとしていたとする。つまり、金子は朴烈と同罪になることを願い、積極的に罪を作り上げるような発言をし、予審調書を通じて朴烈にも自分の考えを訴えて死に誘ったというのである。「文子のもっとも恐れていたものは、朴烈ひとりが死刑になり、自分の刑が朴烈と差別されて軽くなり、生き残ることであった。」³⁴と瀬戸内は指摘する。換言すれば、金子の朴烈への想いが「大逆事件」の捏造を加速させていったということになる。そして、金子と朴の思惑が重なった結果、二人が爆弾を準備し皇太子に投げつけようとしたことが確定し、幸徳秋水事件、難波大祐事件に継ぐ「第三の大逆事件」として予審は終結する。

大審院の特別法廷での裁判に移行した後の第2回公判では、金子は金重漢との共謀は否定したものの、朴烈と同量の刑を受けて死ぬことを希望した。公判調書に添付された金子の書簡の末尾は次のようである。

私は朴を知つて居る。朴を愛して居る。彼に於ける凡ての過失と凡ての欠点とを超えて、私は朴を愛する。私は今、朴が私の上に及ぼした過誤の凡てを無条件に認める。そして朴の仲間に対しては云はう。私は此の事件がばかげて見えるのなら、どうか二人を嘲つてくれ。其れは二人の事なのだ。そしてお役人に対しては云はう。どうか二人を一緒にギロチンに放り上げてくれ。朴とともに死ぬるなら、私は満足しやう。して朴には云はう。よしんばお役人の宣告が二人を引き分けても、私は決してあなたを一人死なせては置かないつも

りです³⁵

瀬戸内はこれを金子の朴への愛を高らかに歌った「恋文」と考え、次のように書いている。

大審院の法廷を利用して、このように堂々とした恋文を、裁判官たちを前に置いて、恋人の面前で読み上げた女は、世界の中に探しても金子文子ひとりなのではないだろうか。³⁶

そして、瀬戸内は、金子が死を志向したのには金子なりの哲学があったとして、板倉受命判事への最後のことばを次のように紹介している。

私がすでにニヒリズムを哲学だといった以上終いまで哲学的に解釈する。

即ち『生を否定する』という事は哲学的に成り立たない。何となれば生のみが一切現象の根本である。生を肯定してのみすべては定義を持ち得るから。さよう。生を否定した時それはすべてが無義である。否定から否定は生まれない。より強い肯定にのみ、より強い否定は生れる。即ちより強く生を肯定してこそそこにより強い生の否定と叛逆とは生まれるのである。だから私は生を肯定する。より強く肯定する。そして生を肯定するが故に、生を脅かそうとする一切の力に対して憤然と叛逆する。

そして、それ故に私の行為は正しい——と。³⁷

このように「生を肯定するゆえに、生を否定するものに対して叛逆する」という論理を持った金子がなぜ死を志向したのか。この問いに対する答えを、瀬戸内は文子のことばを次のように引用することで示している。

こういったらお役人さま方は、じゃなぜ自分の生を破壊しようとするような真似をしたのだ？ というだろう。私は答える——生きるとはただ動くという事じゃない。自分の意志で動くという事である。即ち行動は生きる事の全部ではない。そして単に生きるという事には何の意味もない。行為があつて初めて生きて居ると言える。したがって自分の意志で動いた時、それがよし肉体を破滅に導こうとそれは生の否定ではない。肯定である——と。³⁸

瀬戸内はここに於いて、文子は感傷的に朴烈との心中を図ったのではなく、冷静に哲学的に冷めた意識で死を志向したことを確信している。意志無くしての生よりも積極的な意志がそこに働き、意志を体現するために至りついた死である、と理解したのである。

この後、朴烈と金子文子には刑法第73条と爆発物取締規則3条にあたるとして死刑が判決された。しかし、そのわずか10日後、市ヶ谷刑務所の署長室で告げられたのは「特典ヲ以テ死刑ヲ無期懲役二減刑セラル」³⁹ という特赦であった。これを手にするや金子は破り捨てたという。そして、切望していた朴烈と共に死刑台に上るという願いは叶わず、朴烈は千葉刑務所に、金子は宇都宮刑務所栃木女囚支所に移され無期刑に服することとなる。

国家権力を否定することによって得た死刑は、文子の思想が選び取ったものであった。その栄光を奪われた文子が、国家権力によって与えられた生を否定し、自殺するしか自分の思想を貫く方法はないと判断しそれを決行したのは必然であった、と瀬戸内は説く。

しかし、本論冒頭で触れた李順愛氏は、裁判記録にある金子の言説と瀬戸内の『余白の春』にはズレがあり、「言われるようには、金子は朴に最後まで恋愛感情で引っぱられていた訳ではありません。」⁴⁰ と言う。李氏は1926年3月1日の結審の日の金子の最終陳述の中で「上村弁護人は、私共兩人の関係が恋愛関係であると言われたが、私共の間には上村氏の言われる程の事はなかった事を一言して置く」⁴¹ という部分を見逃さず、先に瀬戸内が引用した書簡の末尾の部分は恋愛感情ではなく、「己の生命を間にはさんで権力と対峙している人間の、もっと素朴な反権力の連帯意識であったろう」⁴² と指摘している。そして、金子の思想は朴に順ずるのではなく、朴を凌駕したと見做し、「金子の場合は、自分を生きたらそこに死刑があったというような事だったろうと思います。」⁴³ と書いている。李氏の見解には傾聴すべきものがある。金子が朴を愛していたことは確かなことと思われるが、金子は恋愛感情に引っ張られ、朴との死を望んだのではない。時の権力の中核、

つまり、国家や天皇制と対峙し、それを否定した結果が死刑宣告だったのであろう。ただ、その反権力志向がなぜに「自死」という結果に結びついたのかについて李氏は言及していない。つまり、金子文子の末期の思想の内実、彼女の反権力志向がなぜ一人「死」を選んだのか、という点については詳しい考察はなされていないのである。

一方、瀬戸内晴美の語る金子文子の朴烈への愛、それは彼を一人では死なせない、共に死にたい、という思いであった。それと、生を肯定するゆえに生を迫害するものへの反逆として死を選択する、というこの二つの思想は金子文子に於いては同時に重なるべきもの、重なることによって完結するはずのものであった。だが、恩赦後、それは永遠に未完結のまま留置所内に放置されることになる。この時、金子文子は前者の想いを捨て、後者の思想を選択したのではなかったか。金子文子は、第一回公判準備手続きの中で

私がやろうとした事はテロであった。而し、其れは謂ゆるテロリズム運動ではない。ニヒリズムに根を置いた運動である。そして、謂ゆるテロリズム運動は、一つの政治運動であるがニヒリズム運動は哲学運動である——と私は思う⁴⁴

と書いている。瀬戸内が、金子が自身の反逆をテロリズムから区別し、思想運動と考え始めている、と指摘しているところだ。また、金子は杉田博士に向って、思想は変わる、大正12年9月、捕らえられた時点の自分の思想と、獄中に三年間も過ごした現在の思想は同一ではないといっている。反逆の思想は変わらなくとも、朴烈と共に死ぬという願いがかなえられなくとも、金子文子は自らの中でニヒリズムを死という形で完結させようとしたのではないか。そこにはもう触れることのできない朴烈を置いて、一人自らの思想に徹しようとする文子がいる。金子文子は朴烈と共にあることよりも、その一歩先を自らの意志で歩もうとしたのではなかったか。自らの意志で選び取ったたった一人の死。この死の瞬間に於いて、自己の虚無思想完結のために、金子文子は朴烈を超えて、一人旅立ったのである。瀬戸内は「未来になんの甘い幻想も抱いていない文子が信じていたのは現在

のこの時点における朴烈との愛だけであった。」という。しかし、朴烈と共に死ぬことを奪われ、国家権力によって与えられた生を否定し自殺するしか自分を貫く方法はない、と考えた金子文子には、朴烈への愛を超えて虚無主義を完結させた金子の真の精神の「自律」があったことを読み取るべきではないだろうか。

1926年2月26日の夜半に書いた公判調書に添付された金子文子の書簡には次のような言葉がある。

つまり私にして外の事情より見れば、全く他人の過失の犠牲になる話だ。が、そうと知りつつも、金翰兄との交渉中、なお私自身を省みりそうした計画を生む思想をもっているがゆえに、犠牲のようしている自分を救い出すこともできない。(中略) 私は自分がかく失敗したことについて、かれこれ悔ゆるのではありません。ただ、その失敗が自分の意志にもとづく失敗ではなかったことを、自分の前に限りなく恥じるものです。いわゆる『犠牲』を蔑みつつ、しかも私自身『犠牲になるのだ』というほどの自覚さえなしに犠牲になることがたまらなく恥ずかしいのです」(「二十六日夜中」)⁴⁵

ここには自己の明白な意識なしに「犠牲」となることへの甚だしい嫌悪が表出されている。ここには強烈な自己意識への信奉がある。自己の行為を自己が選択し、引き受けるということ。愛する朴を置いても成し遂げるべき自己主張。その完璧な実践が金子文子の自死だったのではないだろうか。それを裏付けるように金子は次のように書いている。

私が自分の行為に要求するすべては、自分から出て、自分に帰る。つまりピンからキリまで自分のため、自分を標準とする。したがって私が「正しい」という言葉を使うとき、それは完全に「自律的」な意味においてであることを断わるときです。⁴⁶

まさに、この「自律」の体得と実践が、朴をも置き去りにして、一人、金子が到達した「自死」への道を体現させたと考えるべきであろう。

【終わりに】

以上、検討してきたように、瀬戸内晴美の『余白の春』は、関東大震災に伴う朝鮮人虐殺や社会主義者の抹殺など、時代状況の中に金子文子を還元して描いている。そして、金子文子に関する丹念な文献資料の読解の上に、独自の实地踏査を加え書く方法が特徴的である。そこには「朝鮮」に対する瀬戸内の歴史的関心が感じられ、また朝鮮の人々と金子文子の思想的な連帯の強さが印象的に描かれている。ただ、金子の自伝の中で初めて明かされた性体験について触れていないことは問題があるのではないか。というのも、この経験は自己の意志を無視して結ばれた強制的異性関係であり、それは叔父・元栄との結婚が破談になることに結びつくなど、少なからず、金子文子の男性観や後の朴烈との全く対等な両性の同棲生活の構築、人間の絶対平等の思想など、金子の思想形成にも根源的に影響を与えていると思われるからだ。また、瀬戸内は朴烈への強烈な愛によって金子の末期の思想を解釈している点が特徴的であるが、この愛の過度な強調は、最終的に朴烈を置いて自死を選んだ、つまり、朴烈を超えた金子の屹立した自己の出現、または金子の虚無思想の完成という金子の到達した末期の思想が矮小化される恐れがある。獄死した思想家の激しい恋愛感情という、ある意味、美しくも陳腐なイメージに埋没してしまうことは避けねばならない。瀬戸内晴美が金子文子の死の意味に強い関心をもち、執筆したのがこの『余白の春』であるが、金子文子の末期の思想は、スチルネルらの虚無思想を金子がどのように受容し血肉化していったのか、という問題の探究なしには考えることはできないはずである。この点については稿を改めて論じたい。

【註】

- 1 1931年，春秋社
- 2 1972年，中央公論社。以下，本論における引用はこれによる。
- 3 註2のp.41
- 4 『女 天皇制 戦争』鈴木裕子，近藤和子編，1989年，オリジン出版センター，所収。
- 5 1970年，新潮社
- 6 『明治文学全集 96』1967年，筑摩書房
- 7 註2のp.54
- 8 註7と同じ
- 9 1927年，東京市
- 10 1957年，中島健蔵，岩波書店
- 11 1926・1927年，横浜市役所
- 12 註2のp.26
- 13 註2のp.26
- 14 註2のp.28
- 15 註2のp.68
- 16 『何が私をかうさせたか』の中に3.1運動について記載がないのは、『何が私をかうさせたか』の原稿が栗原一男に宅下げされる時，検閲によって削除された可能性もある。
- 17 『金子ふみ子獄中手記 何が私をかうさせたか』，1972年，黒色戦線社，のp.238には次のようにある。＜私は人違ひをして居たのだつた。朝鮮から帰つて来た当座，祖母につれられて小松屋と云ふ一番小さい叔母の婚家さきにお客に行つたことがあつたが，その叔母の義弟にあたる男をこの男だと思ひ込むで居たのだつた。ところが，実は此の男は叔母の義弟ではなくて，その時私が，近所の家に風呂をもらひに行つて会つた事のある男のうちの一人だつたのである。＞つまり，文子は体調不良により，親戚の男性と顔を見たことのある程度の男を人違いし，小料理屋の二階について行き，男の毒牙にかかつてしまったのである。もし，この時，文子の体調が万全で意識がしっかりしていれば，このような勘違いは起きず，小料理屋の二階にはついていかなかったのではないかと考えられる。
- 18 註17のp.238
- 19 『朴烈・金子ふみ子裁判記録』1977年，黒色戦線社，p.20，第4回訊問調書。読みやすくするため，漢字・カタカナ文を漢字かな交じり文に書き換えた。
- 20 『朴烈・金子ふみ子裁判記録』1977年，黒色戦線社，p.12，第2回訊問調書。読みやすくするため，漢字・カタカナ文を漢字かな交じり文に書き換えた。
- 21 註17のpp.227-228
- 22 註2のp.132
- 23 註2のp.134
- 24 金子は，新山初代が朴烈は他人に爆弾を投げさせて自分は逃げるつもりだと考え，朴烈に悪感情を持っていることを知り，その誤解を解こうとする。つまり，金子は，新山に上海とは連絡がついていて暗号の手紙のやりとりをしているということ，金重漢や新山を利用するつもりはないこと，爆弾が入手できれば金子が投擲するということを以前語ったことがあった。それを聞いていた新山が取り調べの中で，金翰と朴烈が爆弾について連絡を取っていたことを口走ってしまったのである。その結果，金翰と小紅を事件に巻き込むことになり，この二人が証人として呼び出されることになった。これは，すべて金子文子が初代の朴烈に対する誤解を解こうと金翰との手紙のやり取りについて話したことが原因である，と瀬戸内は文子を断罪している。
- 25 李小紅は京城の妓生。13才で他家に養われ，16歳で京城で官妓となる。恋人の影響で社会主義思想を持つようになり，金翰や朴烈を知り，朴烈の手紙を金翰に取り次いだりした。証人として召喚された時は20才であった。
- 26 金翰は当時38歳。朝鮮では無産者同盟会の委員をしていた。上海の義烈団長金元鳳の依頼で上海からの爆弾の授受と配分を行っていた。
- 27 註19のp.138。読みやすくするため，漢字・カタカナ文を漢字かな交じり文に書き換えた。
- 28 註19のpp.138-139。読みやすくするため，漢字・カタカナ文を漢字かな交じり文に書き換えた。
- 29 本論【2】瀬戸内晴美の朝鮮の描き方でも触れたとおり，瀬戸内晴美は日本と朝鮮の歴史を本文中で説明する際，＜それにしても朝鮮とい

う国土は何という悲運を背負っているのだろうか。＞（註 2， p.194）と述べ、＜日本が朝鮮を侵略していった過程＞（同上）を中心に、＜自力で国土を守る能力のない哀れな朝鮮＞（註 2， p.197）、＜韓国はすでに日本の完全な被保護国となっていたが、日本はそれだけではあきたらず、更に徹底的に韓国を自国の支配下に屈服させずにはおかなかった。＞（註 2， p.198）、＜一八七六年の江華島条約以来、条約を結ぶ度に、その条件は、日本の侵略意図を露骨に表してきている。ここに至っては、もう韓国は、事実上の日本の植民地と化している。軍隊を失い、司法権を奪われ、羽も足もむしりとられた瀕死の窮鳥韓国に日本は最後のとどめを刺すことをおこなった。＞（註 2， p.201）、＜日本の言語に絶した弾圧政治の黒い歴史の頁＞（註 2， p.204）というように日韓併合の現実を韓国側の視点から述べ、深い同情を寄せている。また、取材の際に出会った二人の朝鮮人女性について＜どうしても二人が自分と異なる人種の人であるとは思えなくなってきた。皮膚の色も髪の色も、顔立も、そして軀つきも、日本人と朝鮮人はどうしてよくもこうまで似ているのだろうか。＞（註 2， p.211）と朝鮮人と日本人とが酷似していると述べ、親近感を示している。

³⁰ 註 2 の p.285

³¹ 註30と同じ

³² 註2の p.290

³³ 註32と同じ

³⁴ 註 2 の p.301

³⁵ 註17の p.748

³⁶ 註 2 の pp.300-301

³⁷ 註 2 の pp.301-302

³⁸ 註 2 の p.302

³⁹ 註19の p.791

⁴⁰ 註 4 の pp.70-71

⁴¹ 註 4 の p.71

⁴² 註41と同じ

⁴³ 註 4 の p.81

⁴⁴ 註19の p.588

⁴⁵ 註19の pp.743-744。但し金子文子の自筆文が

判読不明の部分があるため『増補新版 金子文子 わたしはわたし自身を生きる』鈴木裕子編、2013年、梨の木舎 p.353を引用した。

⁴⁶ 註19の p.740。但し金子文子の自筆文が判読不明の部分があるため註45の p.351を引用した。

【主要参考文献】

瀬戸内晴美『余白の春』中央公論社、1972年

金子文子『何がわたしをかうさせたか』春秋社、1931年

金子文子『金子ふみ子獄中手記 何が私をかうさせたか』黒色戦線社、1972年

『増補新版 金子文子 わたしはわたし自身を生きる』梨の木舎、2013年

『朴烈・金子ふみ子裁判記録』黒色戦線社、1977年

鈴木裕子、近藤和子編『女 天皇制 戦争』オリジン出版センター、1989年

キム・ビョラ『常盤の木 金子文子と朴烈の愛』同時代社、2018年

後藤守彦『只、意志あらば 植民地朝鮮と連帯した日本人』2010年、日本経済評論社

『明治文学全集 96』筑摩書房、1967年

朴慶植『朝鮮三・一独立運動』平凡社、1976年

朴慶植『天皇制国家と在日朝鮮人』社会評論社、1986年

金廣植「金子文子の思想形成に関する研究」『日朝関係史論集』新幹社、2003年

山田昭次『金子文子 自己・天皇制国家・朝鮮人』影書房、1996年

山田昭次「金子文子と吉野作造の朝鮮観」『植民地支配、戦争、戦後の責任』創史社2005年